

研究主題

子どもの表現力を高める国語科学習指導法の研究

1 主題設定の理由

子どもたちを取り巻く社会や環境は、常に変化し続けている。情報はあふれ、価値観は多様化し、そして、社会を構成する言語も絶えず変わり続けている。このような社会に、埋もれることなく生き抜いていくためには、自分のものの見方や考え方をしっかりもち、自ら発信していけるような子どもを育成していくことが求められている。

現行の学習指導要領は、中央教育審議会『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改訂について（答申）』に基づいたものである。答申では、大きく見ると、現代社会の要請と、子どもの実態に基づく課題を指摘している。

現代社会の要請とは、「知識基盤社会」など時代や社会が要請する学力への対応であり、子どもの実態とは、国内外の学力調査（OECD の PISA 調査、教育課程実施状況調査、全国学力・学習状況調査）などの結果から考えられる子どもの実態上の課題の対応である。その課題とは、思考力・判断力・表現力等を問う読解力や記述式問題、知識・技能を活用する問題に課題があること、読解力で成績分布が拡大しており、その背景には家庭での学習時間などの学習意欲、学習習慣、生活習慣に課題があることが挙げられている。

このような課題を受け、「学習指導要領改訂の基本的な考え方」の中には「思考力・判断力・表現力等の育成」が示されている。また、学習指導要領改訂の方針では、「基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力を育むとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かす教育の充実に努めなければならない。」と明記されている。すなわち、国語科として最も重要視しなければならないのは、「思考力・判断力・表現等の育成」である。もちろん、これらは、各教科等で取り組むべきものであるが、それらの基盤として国語科が重要な役割を果たすものと思われる。

また、「これからの時代に求められる国語について（文部科学省）」では、「言葉や文字によって、意志や感情などを伝え合いコミュニケーションを成立させることは、国語の最も基本的な役割である。その意味で、国語は個人が社会（集団）の中に生きていく上に欠くことのできない役割を担っている。コミュニケーションの基本は、相手の人格や考え方を尊重する態度と言葉による伝え合いであり、国語の運用能力がその根幹となっている。また、言葉によって多様な人間関係を構築することのできる人間形成能力や目的と場に応じた『効果的に表現する能力』は、現在の社会生活の中で強く求められている能力の一つである。さらに、これらの根幹にあるものはコミュニケーション能力であり、国語の力である。」と記述され、表現力の育成に関わる点が重要視されている。

これらのことを考察すると、表現することに関しては、「技能の取得（スキル）」にとどまることなく、学習指導要領の後半に示されていることが重要であろう。つまり、人とつながる言葉を獲得すること、言葉で感じ、考える自分を作ること、言葉の大事さを知り自分の言葉と同じように人の言葉も大事に思う共感的な態度をもつことなどを求められていることが理解できる。私たちは、言葉によって世界とつながり、言葉によって世界の中に「自分」を確立するのだと思われる。だからこそ、国語科は「中核」といわれるのであろう。単に、言語運用力をつけることが望まれているのではなく、言葉の力がすなわち人間力であり、言葉の教育が学校教育の目標である人間教育の「中核」だからだと思われる。

本校の全校児童数は576名で、大規模校である。そのため子どもたちは、学級集団の学習の中でお互いに多様な考えに触れられるメリットはあるが、ほかの子どもの考えに頼りがちになり、なかなか自分の考えをもてないままになってしまっている子どもも少なくないのが現状である。平成25年度に行った全国学習

状況調査、県学習状況調査やC R T学力検査の結果においては、全国の得点率と比較してほとんどの学年が上回っている。しかし、「国語への関心・意欲・態度」も年々上向きになってきているが、依然、全国平均を下回っており考慮していかなければならない。また、全国学力状況調査の結果、いわゆる「B問題」の正答率が低く、自分が獲得した知識を使って自分の言葉で相手に伝わるように表現したり、相手の考えを聴き取ったりすること、そして、題意を理解し問いにあった答えを導き出したりすることについて苦手意識をもっている子どもがいることもわかった。

以上のことより、「表現力を育成すること」を目指して、研究に取り組んでいくこととする。そのために、授業の中に、効果的な「話す活動」を位置づけた学習指導法の研究を行い取り組んでいく。具体的には、本時の目標を達成させるために直接的につながる「話す活動」、あるいは、目標達成に間接的につながる「話す活動」を意図して仕組むのである。もちろん、教材、単元、授業形態、子どもの実態、本時の目標等を考慮して、読みとるために設定していく必要がある。授業の中で、話す活動を手段として用いることで、自らの考えを整理することとなり、自分の言葉にこだわりをもち読み深めていくとともに、自らの思いを伝えていくことにつながると考える。また、「話す・聞く」、「書く・読む」は表裏一体であり、相互的に関係していることから、あらゆる活動を想定できる。これらのことは、言葉を通して的確に理解し表現したり、お互いの立場や考えを尊重して言葉で伝え合ったりすることにも結びつき、己ずと培われていくことになると思われる。今年度は、その可能性を検証していきたい。

具体的な方略として、現段階で考えている3つを提案する。

（１）国語に親しむ

1つ目は、語彙を豊かにし、知識・技能を活用する学習活動を行う場を設定することである。まず授業の中では、子どもにとって切実感のあるテーマを設定し、単元を通して目的意識をもたせ取り組ませることが考えられるであろう。教科書教材を、このような視点にたって工夫することなども大切になると思われる。また、そもそも、語彙を豊かにしたり、知識・技能を養ったりするために、授業における学習活動だけではなく、朝の時間（いまりっ子タイム）での学習活動で、「視写・聴写」「ことばのきまり」等に取り組ませていくことも考えられるであろう。

（２）読みとるための「話す活動」を設定する

2つ目は、1単位時間の中に「話す活動」を、意図的に位置づけることである。1つ目の方略にもつながることであるが、子どもが目的意識をもって取り組むことになる。その視点として、本年度、大切にしたい思考法（ものの見方・考え方）を意識して活動を行っていく。また、そのための場の設定、教師側のはたらかかけも大切にしたい。これは、これまで本校で長年取り組んできた「あいあい学習」にも結びつく。これらの活動を取り入れながら、課題や問題に対する考えと、その根拠・理由を、想像、分析、比較、対象、推論などによって、相互に関係づけて筋道を立てて表現することができると考えている。例えば、読みのめあてやそれに対する自分の読み（解釈）を、根拠となる言葉や文、その理由づけを用いて、筋道立てて説明することなどが挙げられる。今年度は、物語文や説明文に関して効果的であった指導法を、系統表としてバージョンアップさせていくことも視野に入れていく。

○今年度、重点的に身につける思考法（ものの見方・考え方）

- （低学年）・比較（くらべる） 「同じところは～〇〇です」「違うところは～〇〇です」
- （中学年）・関連（関連づける） 「付け加えると～〇〇です」「詳しく言うと～〇〇です」
- （高学年）・総合（まとめる） 「これらをまとめると〇〇と言えます（です）」
 - ・帰着（もとにする） 「～を、もとにすると〇〇と言えます（です）」

○場の設定

(ペア)

一対一を基本に、隣の友だちときちんと言葉でやり取りできることを目指して、活動を行うよう工夫する。相手の話を最後まで聞くこと、分からなかったら聞き返すこと、やり取りによって話の内容が豊かにまとまることを経験することにつながる。

(グループ)

グループで活動する機会を増やす。一緒に何かを作ったり、考えを交換したりすることなども小集団のグループが単位になる。場合によっては、司会が必要であること、目的に沿って発言すること、賛成か反対か、どこが一緒にどこが違うかを明らかにすることなどを学ぶことも考えられるであろう。

(一斉)

学級全体の話し合いも行う。意見を主張する話し合い、反論に対して意見を返す準備などもする。内容を間違いなく的確に伝える話し方、相手を思いやった受け答え、表情やしぐさなどの大切さ、言いにくいことを言わなければならないときの言い方等にも触れさせることも重要である。

○教師の働きかけ

- ・うながす・・・その子なりの見方・考え方を、全員に表出させるための教師の働きかけ
- ・つなぐ・・・その子なりの見方・考え方を、他者と深めたり広げたりさせるための働きかけ
- ・もどす・・・見方・考え方を揺さぶったり新たな見方・考え方に止揚したりするための働きかけ

(3) 声が響き合う空間をつくる

3つ目は、「響け音読」の活動である。具体的には、始業時の音読と音読発表会がある。前者は、スムーズに授業に入る構えをつくと共に、学習の目的に応じて復習や予習など効果的な活動を仕組むことをねらう。後者は、全校朝会等で各学年による発表を行い、そこに向かうために各自で日々の音読暗誦に取り組み、目的をもって個々の表現力や集団としての表現力が高まることをねらう。すなわち、子どもたちが進んで音読を行い、声が響き合う学校づくりをめざすのである。

以上のことから、今年度の研究主題を設定する。

2 研究の目標

言葉にこだわりをもち、自分の考えを進んで表現する子どもの育成をめざす

3 研究の内容と方法

(1) 研究の内容

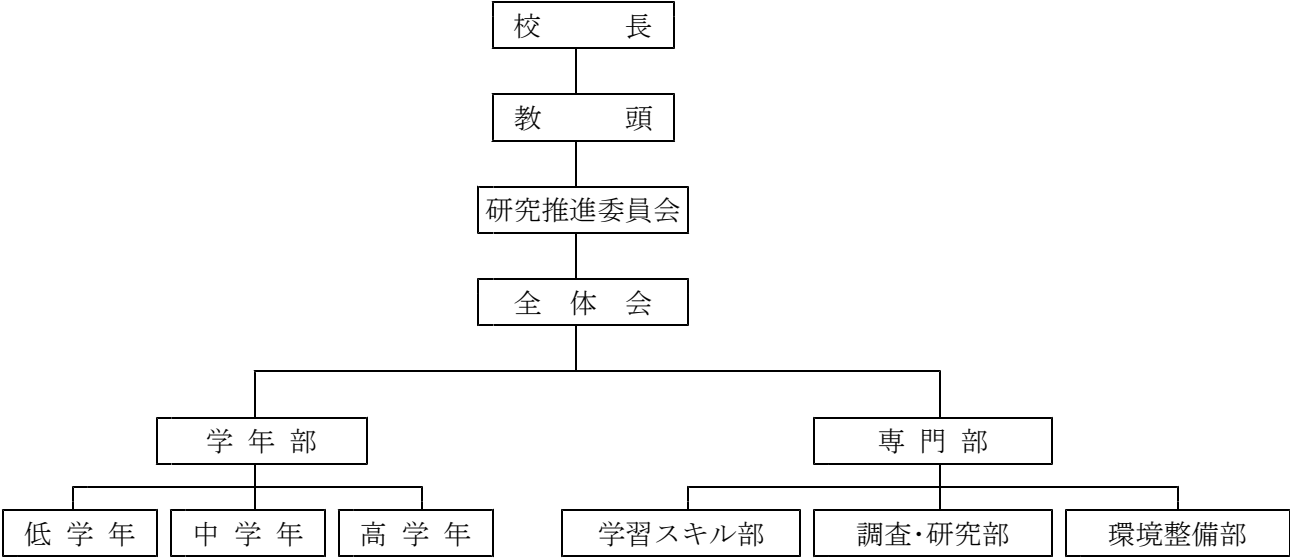
- ①「話す活動」の効果的な方策を探る（「あいあい学習」の効果的な取り入れ方等）
- ②低・中・高学年ごとにめざす児童像を設定し、効果的なものの見方について、実践的に検証する。
- ③「響け音読」に関する効果的な活動を探る。

(2) 研究の方法

- ア 月数回の校内研究（全体会、学年部会、専門部会等）
- イ 授業実践（日々の授業、研究授業、事後授業研究会）
- ウ スキル的な学習訓練等の実施
- エ 文献及び、講師招聘等による理論研究
- オ 教育関係機関の講座受講、先進校研究発表会参加
- カ 通信等による家庭への啓発活動
- キ ICT利活用教育

4 研究組織

(1) 組織図



(2) 学年部

低学年部	中学年部	高学年部
・久保田・井上・樋口 _京 ・瀬戸口・宗田・北島 ・小田・樋口 _善 ・小宮	・小島・市丸 ・岩永・福島・武田 ・山下・川久保・釘町 ・原田・光岡	・吉野・熊崎・前田 ・泉　・宗　・森 ・松園・筒井・松本

(3) 専門部員

	学習スキル部	調査・研究部	環境整備部
低	・久保田・瀬戸口	・樋口 _京 ・宗田・小田	・井上・北島・樋口 _善 ・小宮
中	・岩永・山下・釘町・光岡	・小島・福島・原田	・市丸・武田・川久保
高	・熊崎・前田・筒井	・泉・森・松園	・吉野・宗・松本

(4) 専門部の活動内容

○学習スキル部

内 容	・「いまりっ子タイム」などの，子どもたちの表現力を高めるための取り組みに関する提案 月曜日・・・視写・聴写， 木曜日・・・ことばのきまり ・スキル学習的なプリント等の作成・提供
--------	--

○調査研究部

内 容	・児童意識調査のためのアンケート作成（6月，12月） ・アンケート集計，考察 ・文献，先進校視察などから得た資料等の提供（8月，3月） ・啓発のための通信作成「あいうえお」
--------	---

○環境整備部

内 容	・掲示作成（「響け音読」の取り組み・話型・声のものさしなど） ・国語科における校内掲示物の計画・作成 ・国語科における子どもの力を伸ばすための備品の購入計画
--------	--

5 研究計画

月	日	内 容	月	日	内 容
4	7 11	研究の構想検討，全体計画立案 研究計画提案	10	中 下	全体授業研② 学年部（授業研）
5	7 14 下 28	専門部会 全体会（専門部提案） 児童アンケート実施 理論研究	11	初 中 下	学年部（指導案検討） 全体授業研③ 学年部（授業研）
6	4 中 下	理論研究 全体授業研① 学年部（授業研）	12	初 18 下	「研究のまとめ」提案 2学期の反省，専門部会（まとめ構想） 児童アンケート実施
7	16 28	1学期の反省 専門部会	1	上 30	「研究のまとめ」原稿作成（研究部） 「研究のまとめ」原稿〆切
8	20 22 29	理論研究 学年部（指導案検討） 学年部（指導案検討）	2	中 25	「研究のまとめ」原稿作成， 年間反省アンケート配布 「研究のまとめ」製本作業， 専門部年間反省
9	3 10	学年部（指導案検討） 学年部（指導案検討）	3	19 25	年間反省，次年度構想 次年度構想まとめ（研究部）